「読み」を深めるための古典教育の実践

－「承」の指導実践の考察－

国語科　金森　雄大

要旨　2003年のOECD／PISA（Programme for International Student Assessment）調査の結果により、日本の読解力が大きく落ち込んだことを受けて、読解力の向上が大きな課題として浮かび上がってきた。また、古典嫌いが増えているという調査結果が出たことで、これまでの大学受験のための古典教育も見直しの時期に来ている。そのため、古典指導を通じてPISA型読解力を涵養するための実践とは何かという課題を持ち、実践に当たった。

キーワード　PISA型読解力　古典嫌い　読みを深める　「承」の指導

1-1　PISA型読解力について

まず、このPISA調査の背景としてその基本理念を簡単にまとめると、以下の通りである。

・経済のグローバル化が進み、そのような社会の急激な変化に対応できる人材育成の必要性が増し、教育の重要性が認識されるようになったこと。

・自国の教育システムが、投入してきた財源から見て成果が挙がっているのかどうかの検証が課題となっていること。特に、国際的な比較により、自国の教育施策（インプット）の成果（アウトプット）を評価することができると期待されたこと。

・多くの国で義務教育修了段階にある15歳児を調査対象とし、特定の教育課程でなく、将来の生活技能を活用する能力があるかを見るものであること。

また、その調査中で読解力は次のように定義されている。

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。

これは、学習指導要領「国語」の目標である「国語で適切に表現する能力を育成し，伝え合う力を高めるとともに，思考力を伸ばし言語感覚を磨き，進んで表現することによって社会生活を充実させる態度を育てる。」と相通じる内容であり、学校教育の成果を受け、社会に生きていく能力をみるという、生涯学習的なねらいを持つものである。

また、その中で書かれたテキストを読むプロセスとして、以下の３つを設定している。

① 情報の取り出し（テキストの中の情報を取り出す。テキストに書かれていることを理解し、示す）
② テキストの解釈（書かれた情報から推論してテキストの意味を理解する）
③ 熟考・評価（書かれた情報を自らの知識や経験に関連づける）

日本の現状では、③の「熟考・評価」の問題に課題があり、すなわち自らの意見を表現するところに弱さを抱えると言われている。これを受けて、文科省は「読解力向上プロジェクト」の中で、「学校での取組～３つの重点目標」として、

① テキストを理解・評価しながら「読む力」を高める取組の充実
② テキストに基づいて自分の考えを「書く力」を高める取組の充実
③ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実を上げている。

このように書く力の不足が言われはじめた後、自らの考えをまとめ表現させるという取り組みは現在多く見られるようになってきた。しかし、読む力を高めるためには、テキストを肯定的にとらえて理解する（「情報の取り出し」）だけでなく、テキストの内容や筆者の意図などを「解釈」することが必要であり、そのような取り組みは未だ少ないようである。

1-2　現在の高校生の読書環境

平成１７年度高等学校教育課程実施状況調査の「国語総合」では「読むこと」について「文章の部分は読めても文章全体の展開や内容を的確に読み取ることができない生徒が一定数存在する」という傾向が見られ、「文章

全体を意識しながら、読む能力の向上が求められる」としている。この結果は、PISA型読解力の「解釈」や「熟考・評価」の前提としての「読む能力」に課題があることを示しており、その向上が急緊の課題といえる。

そのような「文章全体の展開や内容を的確に読み取ること」ができないという事態がなぜ生じるのか。

以前から、「活字離れ・読者離れ」が叫ばれてきたが、現在の高校生をとりまく活字環境を見てみると、むしろ「活字帰り」の時代が来ているといえる。彼らは、片時も離さず携帯電話を持ち、メールのやりとりやブログの書き込み・閲覧に余念がない。ネット媒体のコミュニケーションは専ら活字であり、毎日相当数の活字に触れているといって良い。

また、読書環境にしても、いわゆる「古典」や「名作」と呼ばれるような作品は読んでいないにせよ、昨年度の直木賞を受賞した桜庭一樹に代表されるようにライトノベルと呼ばれ、中高生に支持される作品の中にも良質なものも多い。そして、若者が読書環境の中心に置く漫画にしても、伏線を配し、筋が複雑で相応の情報の取り出しや解釈を必要とし、読み応えのあるものも多く存在する。

では、このようなに活字があふれた環境の中で高校生の読みに関わる力が以前に比べ増してきているかといえば、そのようなこともなく、むしろ、依然として先に述べたような「文章の部分は読めても文章全体の展開や内容を的確に読み取ることができない生徒」の数は減る様子を見せない。

なぜ、このようなことが起きるのかと言えば、現在は思考力を必要としない娯楽が多いことが問題としてあげられる。まず、ネット媒体の活字環境にしても、webサイトやブログを公開してる人の総数よりも、現在では閉鎖的なコミュニティからなる「2ちゃんねる」や「mixi」の利用者の方が多いことから、そこに思考力を必要としない娯楽性が明らかになる。webサイトやブログで文章を公開することは、誰かに見られているという抑制力が働き、思考力を働かせ推敲した上で、文章を書くこととなる。それに対し、「mixi」や高校生が仲間内への情報発信の場として利用することの多い「前略プロフィール」では、何書いても閲覧しているのは友人ばかりという意識が働けば、書き手にしても、読み手にしても思考力を使わない文章ができあがる。

では、きちんと推敲され、筋や伏線がある小説の場合はどうだろうか。以前、NHK教育の番組「トップランナー」の中で著名な漫画の脚本担当がインタビューに答えて「最近の読者はいきなりクライマックスだけ見たいから、起承転結のうち『承』をはぶいて構成している」という話をしていたことがある。『承』から色々思考して『転』や『結』にあてはめていくという、読書に不可欠な思考遊戯的作業を、最近の高校生を初めとする読者は嫌がっていることが浮かび上がる。

現在の消費型情報社会に慣れた高校生にとって、一刻も早く「正解」を「知る」ことに重きが置かれ、「承」で様々に思考を巡らし自らの解釈を練り上げることは閑却されてしまう。このことは、物語を読む際に解釈ができないだけではなく、通常の『承』のある構成に対して、誤読をしてしまう可能性を示唆する。また、その誤読に対し、何の責任も追わなくともよい表現の場だけが充実していることも問題となってくる。

その流れをまとめると、以下のようになる。

1．読者が解釈をせず、筋や伏線を理解しなくなることが多くなったため、創り手は「承」を抜いた構成にする。
2．「承（「伏線など」）」を抜いた物語に慣れた読者は、従来の「承（伏線など）」を持つ物語に対しては、「承（「伏線など」）」＝「結（メッセージ）」だと誤解して受けとってしまって影響を受ける。
3．誤読をしたままネット等での発信を行い、メディアや創り手も不評や批判を受け、本来の「結（メッセージ）」を示せないままになる。
4．ますます「承（「伏線など」）」のマイナス描写は誤解を受け、誤読する読者が増え、さらにその部分を省く創り手も増える。

このように見ていくと、「文章の部分は読めても文章全体の展開や内容を的確に読み取ることができない」生徒は、「承」を全体の構造理解に組み入れる訓練を行ってこなかったと考えることができる。また、それを無視して、徒らに「自分の意見を述べたり書いたりする機会」を充実させていったところで「効果的に社会に参加する」姿勢の育成には繋がらないであろう。これらのことを踏まえ、「承」を考えさせることで文章の全体構造へと結びつける実践を行った。

2-1　古典教育の現状

現在、古典が高校生の7割が嫌いな教科にあげられる理由として、まず生徒から聞かれる意見として「文法が煩雑」がある。

現任校では、大学入試で古典を必要とする生徒は少ない。そのため、古典文法を中心に教えるのではなく、「テキストを読むプロセス」のうち、「情報の取り出し」という面から、文法の体系を理解し、古語との関連から「自

らの知識」を「発達」させることに繋がると考え、古典に親しませることを念頭に置いて授業を行っている。

また、古典が嫌いな理由の第二として比較的文法などの理解が早い生徒からは「現代文に比べて、内容が乏しい」といった意見も聞かれる。もちろん、文法などの学習段階では仕方のない面も多いが、実際に現代語訳をして終わりという学習指導がまかり通ってしまっていたのも事実である。そのため、内容を踏まえてキャリア教育とあわせるなどの試みが見られている。

2-2 実践の概要

これらの二つの古典が嫌いな理由を受け、高校一年の国語総合で扱った古文を通じて「全体の構成を理解した上で、書かれていないことを読み取る」ことを生徒の目標として設定した授業を行った。おおよそ授業の流れとして、それぞれの古文に対して、以下のような手順で授業を展開させた。

1．全文をいくつかに分け、文法事項を確認しつつ現代語訳をする。
2．現代語訳から読み取れる内容の解釈を自分の読みとして、まとめる。
3．現代語訳の「承」に当たる部分を明示し、その部分を精読する。
4．精読した後の解釈と自分の読みとがなぜどのように違ったかをまとめる。

2-3 「承」に戻った指導の詳細

特に、3の「承」に当たる部分で、生徒には「文化的背景」と「時間感覚」を意識することを伝えた。

例えば、「児のそら寝」では、現代語訳をした後、生徒にこの話のおもしろさについて尋ね、生徒自身の読みの解釈を書かせると「もう一度起こして欲しいと思っているのに、僧達がむしゃむしゃともちを食べるので、間を外しながらも、返事をして嘘寝をやめたこと」と答えている。これは単純に現代語訳をしたものをまとめ、「無期ののちに、えい。といらへたりければ」という落ちだけに、短絡的におもしろさを求めてしまっているために出てくる解答である。現在、このような解説的になった無味乾燥の古文のおもしろさが蔓延しているように思われる。これは、先に述べたように、訳すだけで満足し、答えしかを求めようとしない姿勢から来るものである。

しかし、「承」に当たる部分として、「しいださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、片方に寄りて、寝たるよしにて、いで来るを待ちけるに」を部分を明示した後、書き手は読者にも共通しているはずのことは書かかないということと共に「時間感覚」として、「ぼたもちを作るのに時間ってどれだけかかる？」という問を投げかけることで、ぼたもちは当然出来合いの物ではなく、その場で作られた物であること、そして、できあがるまでに数時間はかかることに生徒は思い至る。そこから、児が空寝をどれほどしていたのか、「すでにいだしたる」が、児がどれほどぼたもちを楽しみに待っていたかを表しているのか、起こしてもらえず、楽しみに待っていたぼたもちがどんどん食べられていくことへの思いが詰まった「ずちなくて」という語の解釈などを次々と行うようになった。このように、訳すだけで解釈していなかった「承」の部分を考えさせることによって、一語一語に込められた意味という情報を取り出し、解釈を試みようとするのである。そして、そうやって現代の自分たちと変わらない心情を自らが発見し、古典に親しむ態度が涵養されると考える。

この他に、この「文化的背景」と「時間感覚」の良い例として『伊勢物語』「あづさ弓」がある。男が帰って来た時の女の心情を表した、「あらたまの年の三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ」という歌を、「今夜新たに夫を迎えるから」とだけ訳してしまい、女の心情に迫れない生徒も多い。そこで、「承」に当たる「別れ惜しみて行きにけるままに、三年来ざりければ、待ちわびたりけるに」について、考えさせる。この平安時代にとって、「三年」の持つ意味を、単に携帯電話や手紙などの連絡手段がなかったという背景だけでなく、平均寿命が現代の半分である当時の女性にとって男を待った3年で失ったものといった観点から捉え直させることで、『「この戸開けたまへ。」とたたきけれど、開けで、歌をなむ詠みていだしたりける』という場面で、この女が戸を叩かれてから、歌を詠むまでの時間がどのくらいかかったかという問に対して、生徒それぞれが自分の解釈を持つほどに、女の心情を細やかに考えられるようになるのである。

また、「文化的背景」の例としては、一年のまとめとして位置づけていた『平家物語』「木曽の最期」である。この教材もただ現代語訳をしただけでは、「太刀の先を口に含み、馬よりさかさまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける」という、今井四郎の死に様ばかりに生徒の注目は集まってしまいやすい。また、問題にしたい「承」に当たる部分である、今井四郎が義仲に自害を勧める場面でも、なぜ義仲が自害を決意したのかと尋ね、書かせたところ「義仲と今井四郎とが別れ別れになってしまって、名もない兵士に討ち取られるという不名誉を避けるため」と読む生徒が圧倒的であった。（この答えは指導書の答

えでもある。）

その「承」部の最後にある「さらば。」に注目するよう伝えると、一年最後の教材ということもあり、理解の早い生徒はすぐに今井四郎が「御身は疲れさせたまひて候ふ」と本当のことを伝えだした場面に気づき始めたが、うまく言葉にして書くことができないようであった。そこで、「文化的に見た時、義仲は武士にとって何が不名誉になるか知らなかったのだろうか？戦場で恥をさらしてはいけないということを、戦場で教えなければいけないほどであったのだろうか？」とヒントを与えることで「義仲は（今井四郎から）本当のことを言われて自殺を決意したのではなく、今井四郎の乳兄弟に自殺を勧める気持ちを汲んで決意した」という生徒自身の解釈の答えを引き出すことができた。

2-3　考察と今後の課題

これまで述べてきたように、古典作品はその書きぶりのために、誤読を生みやすい。その理由としては、第一に生徒がその文化体系や背景を理解していないことである。これは、本来授業を行いながらその都度伝えていくことで修正していくことしかできないが、実践で行ったように、ある程度誤読をさせ、どうしてそのような誤読に至ったかを理解させるために、当時の文化体系や背景の知識を利用する方がその知識の定着も図れると考える。しかし、このときに注意しなくてはならないのは、その知識が、現代の生徒から見て心情的に納得しうることでなくてはならないことである。古典が嫌われる理由の一つである「覚えることが多い。現代に使えないのに押しつけがましい。」という意見の誘因は、このようなところから来ているかもしれないからである。

第二の理由としては、「当然わかるべきこと」が文章に書かれないことである。これは、生徒が普段接する文章にも言えることであり、このような書き手と読み手とのずれが常に存在することを理解することが、「文章の部分は読めても文章全体の展開や内容を的確に読み取ること」に繋がってくると考える。つまり、生徒の多くは読んでいるものが、常にずれを生じること、解釈を必要とし続けるものということを知らずに読み進めているのではないかと考える。授業後、生徒に書いてもらった感想から抜粋すると、「自分が(物語の）表面上しか読んでおらず、中身を全く深めて読んでいないことに驚いた」「（古文の）内容がとても濃く一文一文にとても深い意味を感じた」このように、現代文、特に生徒が身近に接するような軽い文章であればあるほど、そのずれや解釈の入る余地が少なくなっている（もしくは、必要がなくなる）と考えられる。

現在、受験に古文を必要としない学校で、古典を古語のままで読ませ、現代語訳を通して読ませる意味は、まさにここにあるのだと考える。古語の中から、情報を読み取る作業の中でずれが生まれ、書かれてある世界の文化背景にもずれが生じる。このような文章を読ませ、常に読み手と書き手のずれを意識させることで、自らの解釈を行い続けることが、読解力の育成に繋がると考えるのである。また、感想を見ていると「考え方や感情も見方を変えることで大きく違ったものが見えてくることがおもしろかった」などという意見が多く見られ、このように自分の読みを作り、それがたとえ壊されたとしても、「わかる」という思いこそが、古典嫌いを少なくしていく方法ではないかと、改めて思い至った。

今後の課題としての第一は、やはり文法事項のどこまでを解釈に必要だとして教え、その徹底を図るかということである。当然、生徒にとって一番負担が大きいのがこの文法事項を覚えることである。しかし、ずれを意識させるには、自分で情報を汲み取って行かなければならないため、より一層この文法事項をどこまで教えるかという課題について、考えていかなければならない。

そして、第二は書くことへの指導である。今回は自らの解釈をはっきりさせるために書かせたが、比較的これは普段の生活の中でやり慣れていることだからか、積極的に書く生徒が多かった。しかし、どのように違ったのかという比較する段にあたっては、やはり、うまく書くことができない生徒が多く見られた。これは、PISAで指摘されているように、書く力の不足から生じたものであろう。現代文に限らず、古典や様々な機会を捉えた書くことの指導方法の拡充を図っていかねばならないと考える。さらに、自らが解釈し、それを書くことが社会にどのような影響を及ぼしていくのかというプロセスと循環を意識させた書くことの指導を考えていきたい。

【主要参考文献・資料】

・鳴島甫　2007年2月「古典教育再考－七割もの生徒に嫌われている古典教育からの脱却－」『日本語学』126　明治書院
・田中孝一2007年『PISA型「読解力」－考え方と実践－』明治書院
・「読解力向上プログラム」2005年 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/05122201/014/005.htm 文部科学省
・「平成１７年度高等学校教育課程実施状況調査」2007年 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h17_h/h17_h/05001011540004000.pdf国立教育政策研究所. 教育課程研究センター
・NHK教育「トップランナー」2005年7月24日放送（CLAMP；大川七瀬）